

2022年5月8日 午前礼拝
「神の愛が全うされる時」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】 Iヨハネ 4:7~12

- 7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。
- 8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。
- 9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
- 10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物として御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
- 11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。
- 12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

【説教要約】

① 神は愛

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

Iヨハネ 4:7-8

聖書で使われる「愛」と訳されている言葉は、原語のギリシャ語では3種類あります。その中で、最も多く使われている言葉が「アガペー」という言葉です。非常に特別な「愛」を意味しており、神様の愛に使われる言葉です。

この「愛」は、見返りを求めない愛なのです。愛した相手が、何も自分にしてくれなくても相手に与える愛のことです。

普通、私たちが「愛する」といったときに、必ずそこには見返りが必要です。職場の同僚に親切にするには、同じように親切をしてもらわなければ成り立ちません。友人関係も、自分に何かしてくれたことのない相手を友人として愛することは不可能です。夫婦関係も、お互いに愛を返し合うから成り立つのではないのでしょうか。

ところが、神様の愛の特別なところは、たとえ何のお返しもなくとも、感謝さえなくても愛し続けることです。

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。

正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

ローマ 5 : 6-8

人が愛を行うためには、自分のための理由が必要です。「愛し返してもらえるから」「有能な人だから」「自分の言うことを聞いてくれるから」など。自分の願いを叶えるために、愛を行うのです。このみことばにも書かれているように、「情け深い人」のためならいのちを差し出せるかもしれません。自分が憐れみを受けたからです。

しかし、神様の愛は誰に向けられたのでしょうか。「不敬虔な者」「罪人」に対してです。たとえ愛しても、それもいのちを投げ出しても、人生やいのちをお返ししてくれるどころか、感謝もせず神様に見向きもしない人のためにイエス様はいのちを捨てられました。

しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。「あの人がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたくらうで、釈放します。」

ところが、彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言った。

ルカ 23 : 22-23、34-37

自分を十字架につける人、馬鹿にする人のためにもイエス様は十字架にかかれ、「彼らをお赦してください」と祈られたのです。ここに出てくる人々は、全人類の代表です。イエス様は、信じる人のためにも十字架にかかってくださいましたが、どれだけ愛を示しても信じない人のためにも十字架にかかられました。

愛することについて、私に關しての話です。かつてある人を、イエス様を見習って無条件に、自分の思いと力の限り愛しました。しかし愛は届かず、私は自分の愛が正しく受け取られなかったためにより不満になりました。しかし後になって自分の心の中に本当の動機を見つけて、愕然としました。相手に自分が思い描いた状態に変わって欲しいから全力を尽くしていたのです。なんでも私はやりましたが、無条件に相手を受愛するのではなく、自分の目的のために愛していたのです。それは神様の愛ではありませんでした。自分のための愛だったのです。

Iヨハネ 4 : 8の後半にはこう書いてあります。

なぜなら神は愛だからです。

神は愛。人に対して、「愛のある人」と表現することはあっても、「あの人は愛だ」とは言いません。

しかし、神様は愛なのです。それは、神様がされることのすべてが愛であり、神様こそが愛の唯一の源だからです。聖書を見れば、神様が怒られる場面や戦われる恐ろしい場面など様々な神様の態度を見ることができます。それらすべてが愛から出ているということなのです。

神様がされることは、どんなことでも愛なのです。

ヘブル書にこのような箇所があります。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。

主に責められて弱り果ててはならない。

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

ヘブル 12 : 5b-7

先週の大木先生のメッセージでも、試練は神様が愛をもって与えてくださる試練だと言われていました。

私はこの箇所を知っているので、何かが起こった時に「これは神様が下さった試練だ」と自分に言い聞かせます。しかし緊張もしてしまい「まっすぐ受け止めなくちゃいけない！」とかなりかんでしまうのです。神様がされることだから正しいことだと分かっているけど、それが愛から来ていると分かっていないからです。

しかし、イエス様が罪人である私を一方向的に愛してくださったのと同じように、試練も全く同じ愛から来ていると分かれば、こわばる必要がなくなります。

神様がなさることはすべて愛です。

② どうすれば神様の愛が分かるのか

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

Iヨハネ 4 : 9-10

永遠のはじめから、愛はありました。まだ世界が創造される前から、神様は父、子、聖霊の三位一体の交わりの中で愛を互いに行われていました。

人もまた、その神様の愛の交わりの中に造られました。

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」
神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼ら

を創造された。

創世記 1 : 26 – 27

神様に似せて造られたので、ただ相手のために愛し合う関係がアダムとエバにはありました。しかし、人は罪を犯し、この神様から離れ、同時に本当の愛も失われました。神は愛だからです。人はみな罪人なので、自分のためにしか生きられなくなりました。神様はそれでも愛を絶えず注いでくださっていますが、神は愛だと人が知ることのできる道はただ一つだけです。それがイエス様です。

イエス様こそ、父なる神様にとって最も大切な存在であるひとり子です。そのひとり子を、私たちが罪から救うために遣わして下さり、何の罪も持っておられないのに有罪とし、十字架にかけたのです。それも、誰かに強いられたのではなくご自分からそうされたのです。これは、自分にとって最も許しがたい相手を助けるために、自分の最も大切なものを差し出すのと似ています。神様が最も忌み嫌われる罪の中に人は生きていましたが、神様はその罪へのさばきをなだめの供え物、すなわちいけにえとしてイエス様に負わせました。

これは、私たちが愛すべき人間だったからではなく、救われる理由があったからではなく、ただ神様が愛だから愛を示されたのです。救いようのない者を、最大の犠牲を払って救い出してくださったのです。イエス様に負えなかった罪はなく、すべての罪がイエス様を通して赦されました。人が払えたものはひとつもありません。もし、人が払う事のできるものがあったなら、私たちにも愛があります。しかし私たちには愛が全くないので、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し」たのです。

本当の愛を知りたいと思うならば、このイエス様を通して現わされた神様の愛を見るしかありません。ここにしか、私たちへの完全な愛は見ることができないからです。

③ 神の愛が全うされる時

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

Iヨハネ 4 : 11 – 12

この箇所と、冒頭の 7 節には「互いに愛し合う」ことが勧められています。この「愛し合う」もまた、神様の愛「アガペー」をし合うという意味です。ただ相手の為に自分を犠牲にしてまで愛する、神様の愛を行うということです。そんなことは生まれながらの人間には不可能です。

「神がこれほどまでに私たちを愛してくださった」。これが、私たちにも神様の愛を实践させてくださる方法です。

イエス様が自分のことをどれ程愛してくださったのか。そこに目を留める時、私たちは自分

のためにではなく、相手のために愛することができるのです。私たちにも、相手を愛することができるようにして下さるのです。

私たちが人を愛する理由は、「イエス様が私を愛してくださっているから」なのです。

そして、私たちが愛し合うなら、「神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされる」と書いてあります。

全うとは、ゴールする、目的を果たすということです。神様の愛にはご計画があるのです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

ヨハネ 12 : 24

これはイエス様が、ご自分とご自分に従う人たちについて言われたみことばです。まさに、一粒の種が蒔かれるように、イエス様がいのちをささげ十字架での贖いを成し遂げてくださいました。その愛は聖霊を通して弟子たちに引き継がれ、教会が出来上がっていきます。

ご計画はそれで終わりません。神様の愛の最終目標は、神様がどのようなお方なのか、クリスチャンが愛し合う事を通して世の人が知ることなのです。神様は、「いまだかつて、だれも神を見た者はありません」と言われます。目に見えない神様を知るためには、クリスチャン同士の愛を見れば分かるということです。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。

ヨハネ 13 : 34-35

これは、クリスチャンが愛し合うことそのものが宣教になるということです。もちろん、ことばで伝えなければ福音はわかりませんが、教会を見ればその中に神がおられることを見ることができるということです。

このように、イエス様。次に教会。次に世の人々と、成長する一本の木のように「神は愛」ということが知れ渡っていくというご計画なのです。

その力は、「神は私たちのうちにおられ」とあるように、愛し合う中に神様ご自身が動き、働いてくださるところにあります。

本当に幸いだと感じるのは、滅びるべきだった愛の全くない者をイエス様に繋げてくださり、愛せるように変えてくださるということ。イエス様からの愛により、クリスチャンを通して神様を知らない人が神様を知ることができるように用いてくださるということです。クリスチャンひとりひとりを、このご計画の完成のために用いようとしてくださっています。